

平成二十七年一月二十七日加茂法話会

法句経が説く閻魔王（えんまおう）の存在

比較的初期の仏教経典とされる「法句経」（ダンマパダ）において閻魔王（えんまおう）という名前が出てくる。

閻魔王とは死後の世界における人間を中心とした生き物達が生前（つまり生きていた時）になした悪事を裁く存在、死後の裁判官のような存在。

法句経（ダンマパダ）において仏陀はこうお説きになられている。

「汝はいまや枯葉のようなものである。閻魔王（えんまおう）の従卒もまた汝に近づいた。汝はいま死出の門路に立っている（あの世への入り口にいる、死後の世界への入り口にいる）。しかし汝には旅の資糧さえも存在しない。だから自己のよりどころをつくれ、すみやかに努めよ。賢明であれ、汚れをほらい、罪過がなければ天の尊い処に至るであろう。汝の生涯は終わりに近づいた。汝は、閻魔王の近くにおもむいた。汝にはみちすがら休らう宿もなく、旅の資糧も存在しない。だから自己のよりどころをつくれ。速やかに努めよ。賢明であれ。汚れをほらい、罪過（つみとが）がなければ、汝はもはや生と老いとに近づかないであろう」とある。

狼の断食

昔、ブラフマダッタ王がバーラーナシーの都で国を治めていたころ事である。

ひとりの菩薩が帝釈天という神様になって修行を続けていた。ガンジス川は豊かな水をたたえ、両岸に広がる森や野原は濃い緑に覆われて、そこには数え切れないほどの鳥や獣が住んでいた。

そのガンジスも年に一度荒れ狂う洪水のときがある。春から夏に向かって長い雨の季節が来ると、降り続く雨と遠いヒマラヤの雪解け水とがひとつになって川はたちまち大波を打って両岸の土地を浸すのだった。

そんな時期ガンジスの岸に近い岩場に、一匹の狼がいた。岩山の裾を水が取り巻き、ひたひたと頂上に向かって増え続けた。餌がない、これで三日狼は何も食べていなかった。

「こりやだめだ、当分腹のたしになるようなものにはありつけそうにないや。まあ、あと十日もして水が引くまで、ひとつ断食の行でもしてみるか」

狼は独り言を言つて断食の行を思いついた自分に忌々しさと同時にホッとした気分を味わっていた。

狼の断食がいつまで続いたか、80分もすると彼の頭には丸々肥った野うさぎが思い浮かんだ。

「いけねえ、いけねえ、断食の行だ」

彼は頭を振つてこの妄想を追い払った。そして二十分もすると鹿の肉の柔らかい歯ざわりが甦ってくる。

「断食というやつは余計腹の減るもんだ」

そういつて彼は生唾を飲み込み飲み込み、まだ十分も経たないうちに、今度はどうだろう、目の前に一匹の若い羊がいるではないか。彼はすぐさま決心した。「やめたあ。断食の行なんでものはまたいつでもやれる。」

彼は力いっぱい後足で岩を蹴り、羊に向かって飛び掛った。と、羊はこれまた優雅な跳躍を見せて、そのまま天空の彼方へ消えていくのである。

「チキシヨ、まっいい。なんにしても一度決心した断食の行を破らなかつたのが幸いというもんだ。さっやるぞ、十日間の断食」

狼はまた心を取り直した。そのとき虚空に鈴のような声が響いた。

「われは帝釈天である、いま羊の身となって汝の心をためした。その場の成り行きで決心したものはまた成り行きによつて破られる。決心とは思いつきではない。暮らしの積み重ねである。汝にどのような暮らしがあつたか？」それは音楽のように余韻を残し、羊の消え去つた天空に帝釈天の姿があらわれた。

お釈迦様はそう説き終えられ、このときの帝釈天こそ前の世の私であつたと言葉を結ばれた。